
ずっと好きでいたかった

ゆっきー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ずっと好きでいたかった

【Nコード】

N0193G

【作者名】

ゆっきー

【あらすじ】

近所に住む年上の男性に密かに想いを寄せている主人公・瑠璃花。ある日、学区内の運動会で見かけた衝撃的な出来事を見てショックを受けてしまう。だけど、相手の気持ちを知ってて瑠璃花は気持ちを伝えてしまう。

悲しい涙さえ流さないのに…

ねえ、もし自分の好きな人が年上で、奥さんと子供がいたらどうする？

私だったら涙が枯れるまで泣くと思うな。地球が潰れても泣いてると思うな。

男性が十八歳で結婚っていう法律が変だよ。女性も十六歳つてのも変だけどね。せめて男女二十歳のほうがいい。いや、二十歳じゃ嫌だ。二十二歳のほうがいい。

でも、現実はそのなにごくはない。私がどんなに「結婚は二十二歳にして下さい。無理なら二十歳にして下さい」って、偉い人に言ってもダメだよな。当たり前だけど、私の力じゃどうにもならない。

人間って勝手だよな。人間は勝手だからすれ違いやケンカや言い訳が多くなっていく。人が人を傷つけたりもする。

私の片想いの人——青山翔太。十九歳で社会人。しかも、私の近所に住んでいる。私は翔太君って呼んでる。

私には一つ不安がある。それは、彼女がいるかどうかってこと。いない感じがするし、直接本人に聞くのも怖い。どうしても彼女がいるって悪いほうこうに考えちゃう。

自分の好きな人が、片想いの人がいたり彼女がいるから、悲しい想いをしたり、悲しい涙を流したりするんだ。色んな不安な気持ちもする。そんな悲しい想いをしなければ、悲しい涙さえ流さないのに…。

ねえ、絶対に悲しい涙を流さないようにしようね。

赤い糸は誰につながっているの?!

私、高野瑠璃花。美術部に所属する中二の女の子です。

私の片想いの翔太君は、私の家から10m先の家に家族と住んでる。翔太君は仕事が忙しいみたいだから、家には帰ってくるのが遅いみたい。私の事は瑠璃花ちゃんって下の名前で呼んでくれる。名前を呼ばれる時が一番嬉しいんだ。翔太は優しくて勉強がよく出来て、小学校から高校までバスケットをやってたんだ。社会人になってからは全くやってないみたいなんだ。私なんか、運動オンチだからバスケットなんてとんでもない。運動得意って羨ましいなって思ってしまう。

「瑠璃花、何ニヤけてんの?」

真理がジーンと私を見ながら言う。

「べ、別に…アハハ…」

笑ってごまかしちゃう。

「わかった。例の彼の事でしょ?」

「バレた?」

「バレバレよ。ホント、瑠璃花ってわかりやすいよね」

お弁当を片付けながら言う。

「やだなー。そんなにニヤけてたのかな? そんなことなかったと思うけど…」

「早くお弁当食べなよ。時間なくなっちゃうよ」

真理が催促する。

「あ、うん」

催促されて、私は時計を見ながら慌てて返事する。

いつもこんな感じだから、何をするのにも真理に催促されちゃう。

一日、翔太君の事考えてる。教室で「翔太君、大好き!」って言い

たいくらないんだけど、そういうわけにはいかないから、自分の胸の中にしまってる。

それに、翔太君に恋してるからクラスの男子が子供っぽく見える。当たり前なんだけど、五つも年上だとこんなに違うんだって感じてしまう。でも、翔太君の少年っぽい目はクラスの男子と変わらないんだよね。

放課後、私は部活はなくて、一人で歩いてる学校の帰り道。真理は陸上部だから、週に一日しか休みがない。真理は運動が好きだから毎日でも運動したいって感じなんだ。ついでに私は美術部で、週に三日だけの活動。絵は上手くもない下手でもない中つてとこかな。もうすぐで家につくって時、誰かにポンツと肩を叩かれた。ビックリして振り返ると、

「よっ！」

翔太君が手を上げて立ってた。

その瞬間、私の胸は高鳴り始める。

「今、学校の帰り？」

「はい。翔太君は仕事は？」

「今日は休み。オレの仕事は、土、日が仕事がある仕事だからな」

「へえ……」

ドキドキしながらうなづく。

学校の帰りに翔太君に会えるなんて嬉しいよ。学校の帰りに翔太君に会ったのってこれが初めてじゃないかな？ 今までは塾の行く時ぐらいしか会わなかったもん。今日はなんかついてるみたいだよ。

「瑠璃花ちゃん、宿題ある？」

「確かあったはず……」

あれ？ 宿題ってなんだっけ？ えっと…えっと…あつ！ 数学のプリントだ！

「瑠璃花ちゃん…？」

「ある！ 宿題あります！」

宿題を思い出し大声を出す。

「じゃあ、宿題持ってオレの家に来てよ」

「瑠璃花ちゃんわかった？」

「なんとなく…」

気弱な返事をする私。

せっかく翔太君に数学教えてもらってるのに、こんなんじゃダメだよ。私、数学が苦手なんだ。やれば出来るんだろうけど、理解するのに時間がかかる。まったく自分が情けないよ。

実は私、三年前の夏に引っ越してきたばかり。偶然、引っ越してきた家の近所に翔太君一家が住んでて、翔太君がいることを知って好きになったんだ。翔太君を好きになった理由なんてないと思う。翔太君を見た途端に、“好き”っていう気持ち芽生えてきちゃった。チラッ。

翔太君をチラ見する。

彼女いるのかな？ もし、彼女いたら、私がこんな近くにいたらヤキモチ妬かれるかな？ いないって答えを期待してるんだけど、未だに怖くて“彼女いるの？”って聞けないでいる。あまりに臆病すぎて…。

「ん？ どうした？」

翔太君は顔をかしげる。

ジーツと翔太君の顔を見すぎて、翔太君の言葉で我に返った。

「なんだよー？」

「な、なんでもないっ！」

自分の顔が赤くなっていくのがわかる。

「ま、いいか。あと一問だし頑張ろうぜ」

「はい」

「おー、いい返事だな」

「エヘヘ…」

私が笑うと翔太君も笑ってくれる。

翔太君…笑った。なんか、友達といるみたいにリラックスしてるよ。この気持ちはなんだろう。淡い魔法をかけられてるみたい。今までに感じたことのないトキメキ。このまま翔太君に甘えたい気分。そう思っただけで心が和むよ。

最後の一問も終わって、翔太君のお母さんが作ったクッキーと紅茶をご馳走になって、翔太君と色んな話をした。

「うわぁ…翔太君、今と同じ顔してる」

翔太君の子供の頃の写真を見せてもらった。

「当たり前だろ？」

「そうだよ。私、小さな時と今と違うよ？」

「アハハ…。それ、絶対整形したんだって」

「ひどーい！」

「ごめん、ごめん。冗談だよ」

こんな冗談を言ったりして楽しい時間が過ぎていった。

「あっ！ もう五時だ！」

ふと時計に目をやった私は、声を上げた。

「もうそんな時間か…」

私の声に目をやった翔太君はポツリと呟く。

「もう暗いから早く帰りなよ」

翔太君の口調がさつきとは違いキツい口調になる。

「でも…」

「いいから早く…」

よりキツい口調になる翔太君。

なんかこの言い方すごく嫌な言い方。私にいてもらいたくないような、私の胸にグサツとくる、そんな言い方だった。

翔太君、なんでそんな言い方するの？　なんでさっきとは違う言い方するの？　五時には帰って欲しい理由があるの？

翔太君が少し怒ったような表情で私を見てる。そんな表情で見られるのが嫌で、

「じゃあ、またね」

って、数学のプリントと筆箱をカバンにつめて出て行っただの。

翔太君の怒った表情。少し嫌だった。怒った表情で見られた時、ドキツとしちゃった。さっきまで機嫌の良かった翔太君。どうしたんだろう？　もしかして、私何かいけないことしたの？

じわっ。

そう思ったら涙が出てきた。

きっと知らない間に何かいけないことしたんだよね…。きっと知らず知らずの間に…。

どうしよう…

「考えすぎだつて。そんなことないよ」

昨日の事を真理に話したんだ。

「だつて…」

「彼、瑠璃花の事、嫌いで言っただんでもないし何かされたつてわけ
で言っただんでもないと思うよ」

「すごく嫌な言い方だっただよ？」

「そんなことないつてば。帰るのが遅いと瑠璃花の家の人に怒られ
るからつて意味で言っただと思うよ」

「…だよね…」

昨日の事がつかかつてる。怒ったような表情。それに、早く帰っ
て欲しそうな言い方。私にはグサツとくる感じだった。

失恋したわけでもないのに、胸がチクチクして痛い。ただ翔太君に
嫌な言い方されただけだよ。それなのに、涙が頬に伝う。

「瑠璃花?! 何泣いてんの?!」

真理が驚いてる。

「うつん、なんでもない」

涙をぬぐって立ち上がった。

「理科室行こう」

私は涙を誰にも気付かれないから立ち上がる。

「う、うん…」

真理は呆氣にとられる。

当たり前だけど…なんか…淋しいな…。あんな言い方されて…淋し
くなっちゃったな…。

だって翔太君は私が好きだつて事は知らない。翔太君は何にも知ら
ない。私のこの気持ちはどうしたらいいの…? どこに持っていっ

たの…？

こんなに好きなのに、翔太君に“好き”が伝わらない。どうやって伝えるの？　いつそのこと、翔太君に私の“好き”は伝わらないほうがいいのか？　それとも、気持ちを伝えたほうがいいのか？

「今日の実験よくわかったね」

真理はやっと終わったというふうに言った。

「そうだね。さっぱりだった」

私は笑顔になる。

そんな私を見ながらふっと笑って、

「やっと笑った」

「え…？」

「理科室行く時から授業中、ずっと落ち込んでたから…」

「ありがとう、真理」

礼を言いながら、理科の教科書とノートを両手で抱きしめた。

「瑠璃花、彼にバレンタインあげるの？」

真理がバレンタインの話題を変えると、思わず私の歩く足が止まっちゃった。

バレンタインのチョコだね。去年のバレンタインはいっぱい迷って結果、結局渡さなかったんだ。

二月十四日。聖バレンタインデー。

神様が一年に一度チャンスをくれる日。片想いの女の子も、両想いの女の子も、チョコを渡す日。全国が甘い香りのチョコが漂っている。

そんな中、私は、
はあ……。

大きなため息をついてしまう。

い、いけない。ため息なんかついちゃった。

「もしかして、今年も悩んでるとか言うんじゃないでしょうね？」

ジロツ。

真理が睨みながら言うの。

真理が言うとおり、今年も悩んでる。

翔太君は十九歳。中二の私なんか目に入らないと思う。チョコを渡しても失恋することはわかってる。失恋なんか嫌だよ。だけど、翔太君なら受け取ってくれるような気がする。でも、私の考えは良くないほうへ向いちゃう。

「私、チョコなんてあげれないよ」

「瑠璃花っ！」

真理がまた睨むの。

ああっ…どうしよう…。私、迷いのツボにハマってるよ。

「去年も“チョコなんてあげれない”って言ったでしょ？ 今年こそあげなきゃ。フラれたからって近所付き合いが終わるわけないんだから…」

「うん…」

「彼女いたっていいじゃない。まあ、出来ればいいほうがいいけど、気持ち伝える事が大切なんだからね。それにいないと仮定して他の女の人に取りられちゃうよ」

真理の言った言葉に、言いかけた言葉を飲み込んだ。

そうだよ…ね…。自分の気持ち伝えないと他の女の人に取りられちゃうよね…。取られちゃう…。この言葉が胸にズシンってきたけどそのとおりだよ。それに、失恋したからって翔太君家族と近所付き合いが終わるわけないもんね。

私が臆病じゃなかったら良かったのにね。傷付くのが怖い。失敗が怖い。だから、ずっと片想いのまま。

今年のバレンタイン、まだ迷ってる。チョコをあげるかあげないか――。

甘い香りのバレンタイン。ホントにどうしよう…。

ブルーな気持ち

もし、翔太君にチョコをあげたとして受け取ってもらえなかったら？ 答えが“NO”だったら？ 私はどうするの？ 翔太君、ビツクリしてまともに顔を合わせられないと思う。

…ゴメン…。

翔太君の答えがぐるぐる回ってる。どうしよう。ハッピーエンドなんて無理だよ。翔太君の答えはわかってる。わかってるつもりだけど考えたくない。翔太君の「ゴメン」を聞きたくない。

「瑠璃花ちゃん！」

背後から翔太君が私の名前を呼んで、私の心臓はハイジャンプした。

「しょ、翔太君…？」

私ってば思わずビツクリ顔をしてしまう。

ドッキン…ドッキン…。

私の心臓、今にも飛び出しそうなくらい大きな鼓動をしてる。

翔太君は昨日とうって変わっての笑顔。

「昨日はゴメンね」

「え…？」

急に謝るからわけがわからないでいる。

「五時にさつさと帰れみたいな態度取っちゃって…」

「全然いいの。アハハ…」

笑ってごまかすけど実は気にしてる私。

「…ならいいんだ」

笑顔でそう言った翔太君。

だけど、私、見たんだ。翔太君が一瞬、悲しそうな笑顔をしたのを…。

まだ何もわからないけど、一体、誰の事を考えてるの？ 何を見つ

めてるの？ 私の心の中、不安が広がっていく。もう少しでバレンタインなのに、不安にさせないでよ。

「今から二人でケーキ食べに行こうか？」

翔太君が提案する。

「…うん…」

少し間をあけて返事した。

すぐに返事は出来なかった。迷ってるからすぐに返事は出来なかった。

「人並んでんな」

翔太君が店の前で啞然としてる。

駅前にある人気のケーキ屋さんに来ただけど、外にはたくさんの十人近くのお客さんが並んでる。夕方なら結構空いてるんだけど、今日はスペシャルメニューのせいとお客さんが並んでる。

「今日はスペシャルメニューがあるからだな。中に入れるまで寒いけど待とうぜ」

「そうだね」

うなずきながら店内を見る。

ガラス越しの私、真っ暗でなの。私、一人が暗い。こんなに暗いのは、バレンタインのせい？ それとも、翔太君のせい？ まだ迷ってるから暗いの？

「おいしいね」

「オウ！」

ケーキを前にしてぎこちない笑顔を作る私。

並んで三十分で中に入れたんだ。

私はスペシャルメニューで、キャラメルのスフォンケーキの生クリーム添えにオレンジジュース。翔太君はブルーベリーのタルトにコ

ーヒー。ケーキ食べて元気を補充して、バレンタインたくさん悩むよ。

私、自分に自信が持てないでいる。神様って意地悪だね。私みたいに自信が持てない子と明るい性格の子を二種類作っただもん。明るい性格の子でも自信が持てない時もある。だけど、私にはそんなふうに見えないよ。みんながみんな同じ性格が良かったな、なんて思ってる。だけど、それじゃあ、つまんないよね。

神様、私みたいな子でも好きになってくれますよね？　もしかして、明るい子じゃないとダメなの？　ううん、絶対そんなことない。私みたいな子でも好きになってくれるよね？

「今日はどうもありがとう」

自分の家の前で、翔太君に礼を言う。

「いいよ。オレこそ急に誘ってゴメンな」

「うん。今日はごちそうさまです」

「じゃあな！」

翔太君は元気よく私に手を降って家に入っていく。

「バイバイ……」

そんな翔太君の後ろ姿を見ながら、私は小さく手を降った。

瑠璃花、どうするの？　翔太君にチョコを渡すの？　失恋するかわからないけど渡すの？　答えはまだまだわからない。やるだけの事はやっていきたい。

翌日、私が学校に来ると、クラスの女子が雑誌のバレンタイン特集を見てる。

「これ可愛いね」

「こつちも可愛いよ」

指差しながら騒いでる。

みんなキラキラ輝いてる。不安な気持ちはみんなにだってあるはず。私だけじゃないんだよね。

雑誌のバレンタイン特集を見てる同じクラスの女子を見ながら思う。

「瑠璃花、どうするの？」

真理が私の背中をツンツンつつきながら聞いてくる。

私は振り返って、苦笑いしちゃってる。

「決めた？」

「え、あ、えつと…」

うまく言えない。

「まだ迷ってる…」

「ええっ?!」

真理は信じられないっていう感じの表情をしてる。

「バレンタインまであと十日だよ。わかってる？」

「うん、わかってる」

わかってるけど決められない。自分の気持ちがコントロール出来ないで、ブルーな気持ちだよ。こんなのって悲しいよ。

翔太君の笑顔が、私の頭の中でぐるぐる回ってる。自分ではどうすることも出来ない淋しさと不安。二つが重なってふいに泣きたくなる。

「今年もそんなに迷うなら渡すのやめたら？」

真理は冷たく言うけど、ホントにそのとおり。

あげないほうがいいよね。

「渡すのやめる…」

真理の言った事をおうむ返しのようにつぶやく。

真理が他の人に取りられちゃうって言った。だけど、今は迷うなら渡すのやめたらって言われちゃった。当たり前だよ。バレンタインは目の前まで来てるのに、まだ迷ってるなんて変だよ。はっき

しなきゃいけないよね。

真理の一言に色んな想いが駆けめぐる。

「私、チヨコあげるよ」

ポツリそう言ったんだ。

「よしっ！ そうこなくちゃ！」

真理は自分の事のように喜んでる。

「実は瑠璃花のあげるって答えを導くために、渡すのやめたらって言ったんだ。冷たく聞こえたかもしれないけどゴメンね。どうしても今ここで諦めて欲しくないし、自分の気持ちを伝える大切さを知って欲しかったんだ」

真理は謝りつつ言葉の意味を伝えた。

「そういう意味だったんだ。私、ホントにやめたらって言ってるんだと思ったよ」

「ビックリさせてゴメンね」

「ううん、いいの。真理のおかげで決断出来たから、ありがとうね」
真理に苦笑いじゃなくてにっこり笑顔を向ける。

自分の気持ちを伝えたい。失恋したっていい。気持ち伝えなきゃ、何も始まらない。

ハア…。

たくさん悩んだ後のため息をひとつ。

もしかして、私、チヨコの事、後悔してる…？

もう少しダイエット

学校に帰ってから、洗面所に置いてある体重計に乗ったの。
ガガーン。

な、なんと、二kgも増えてたんだ。

冬休みたくさん食べたからだよ。どうしよう…。あと十日だよ。十日で二kg減らすなんて無理だよ。それに、無理なダイエットなんて禁物だもんね。とりあえず、運動して間食やめなきゃいけないよね。

そして、私のダイエットは始まった。

間食やめるって決めたけどやっぱりキツイよ。運動はジョギング。家から一kgのどこにある公園まで走って、公園まわりを五周走って、そしてまた家まで戻る事にしたの。

元気よく外に出るけど、すごく寒いよ。だけど、星はとても綺麗。

「うー、寒いっつ」

私は独り言のように言う走り出した。

十日であまり痩せないかもしれないけど、少しでもいいから体重を減らしたい。好きな人のためにこんなに真剣になるなんて思わなかったよ。

走り始めて半分もたないうちに疲れちゃった私。

ゼエハア…ゼエハア…。

キ、キツイよ。でも、頑張らなくちゃ。自分が決めた事だもん。翔太君のためもあるけど体重増えた自分のためでもあるもんね。

公園まで来ると、少し休憩。ベンチに腰をかけた。

その時だった。

「くんばんは」

声を掛けられて、顔を向けると可愛い子犬を連れたお姉さんがいた。その人は二十歳くらいで、優しそうな感じなの。

「こんなとこで何してるの？」

「ちょっと太ったからジョギングしてるんです」

「もしかして、バレンタインのため？」

私、バレンタインって言葉が出たらうつむいちゃった。

これってそうですって言ってるようなもんだよね。

「やっぱり…。後悔だけはしたらダメだよ」

「ハイッ！」

元気よく返事しちゃった。

そうだよ。後悔だけはしたくない。お姉さんに言われたもん。私、バレンタインまでにダイエット成功してみせるよ。

「ダイエット——?!」

真理ってば声がでかい。

慌てて真理の口をふさいじゃう。

翌日の朝、真理にダイエットをすることを伝えたらビックリな大声を出したわけ。

「真理、声がでかいよ」

私は頬をふくらませる。

「ゴメンって…。マジで言ってるの？」

「うん。昨日からやってるんだ。まあ、無理はしない程度にやってるんだけどね」

「そっか。頑張ってるね」

「ありがとう」

真理の頑張れコールを受けた私。

「ダイエットか…。私はやったことないなあ」

「え?!」

「何ビックリしてるのよ？ 当たり前じゃない。中学生なんだよ？」
「そりゃそうだよな。真理は太ってないからダイエットの必要ない」

かも…」

「そうなのかな。とりあえず、無理は禁物だよ」

真理の忠告を聞きながら、バレンタインの事を考えていた。

ダイエットをしてから六日。バレンタインまであと四日。

明日は学区内の運動会。明日は子供から大人まで町内で参加出来る運動会。出入り自由、見学だけでもOKな運動会だから解放感に溢れてる。当然、私と翔太君一家は同じ町内だから同じチームなんだ。それに、抽選で各町内から小四から中三までの男女二人ずつダンスをするのに当たっちゃって、ダンスを踊らなきゃいけないんだ。各町内からだから三十人はいるんだ。一週間前から練習して、すごくキツかったんだけど今日のために頑張ってきたから成果を発揮したい。二曲だから余計に練習キツかったけど、ダイエットには効果あったかもしれないな。ダンスの練習があつたこの一週間は、ジョギングは学校終わってからしてたよ。

だけど、明日は翔太君にいっぱい会えるから嬉しいよ。でも、午後から仕事あるみたいだから午前中だけ見るとママが言ってた。午前中だけでもいい。翔太君に会えるなら…。彼女でもなんでもないから、わがままは言えないよね。

お菓子はどうしよう…。もし、翔太君に「お菓子食べよう」って言われたら、ほんの少しだけならいいよね。少しだけなら食べてもいいよね。

瑠璃花倒れる？！

翌日の学区内の体育会の朝、体重計に恐る恐る乗ってみたの。そして、 -1kg 減ってたの。あと -1kg 減れば元に戻るよ。

「瑠璃花！ 早くしないよ！」

「はい！」

台所からママが呼んでる。

簡単に身支度をする、ママと一緒に学校に向かう。

パパは役員だから三十分前に学校に行ったんだ。

実は昨日の晩ご飯と朝ご飯食べなかったんだ。そのせいで、
く~~~~~~~~つ。

お腹鳴っちゃったの。

仕方ないよね。

学校に着いて、真理が私の住んでる地域のテントまで来てくれたの。
「瑠璃花、おはよう。早速だけど彼はどんな人なの？ 来てるでしょ？」

真理に催促されると、私は翔太君を探す。

「前列に座ってる紺のジャージ着てる人だよ」
翔太君を見つけると、真理に教える。

「後ろ向いてるから顔が見えないよね」

「そうだね。あ、こっち向いた」
真理ってばまるで好きな人を見つけたような感じで、私よりキャピキャピしてる。

「あの人か。結構、いい感じじゃん」

「そうかな？」

「うん。お似合いだよ」

「ありがとう」

思わず、真理が言った“お似合い”って言葉に反応しちゃった。
お似合いだなんて嬉しいよね。片想いだけど嬉しいよね。
クラッ。

ヤ、ヤダ。目の前がクラクラしちゃった。ご飯抜いちゃったからかな？ お昼まで我慢しなきゃ。

そして、九時に学区内の体育会は始まった。

プログラムの一番は、小学生の100m走。最初は一年から三年までが走って、その次に四年から六年まで走るの。参加賞がもらえるんだけど、一位から三位まではもっといい参加賞がもらえる。

私が出るダンスは、十一時半からだからまだ先だ。

その間、翔太君と話してた。

「ダンス頑張れよ」

「目一杯、頑張るね」

「写真いっぱい撮るよ」

「変な顔してるのはダメだよ」

「わかってるって…」

私達の間、幸せな一時が流れる。

街中、バレンタインで一色。甘い香りに包まれてる。なんだか、ウキウキしてる。

公園でお姉さんに言われた。後悔だけはしちゃダメよって…。

ハア…。

深いため息。

バレンタインの事でため息ばかりついてる。
後悔してる？ ううん。後悔なんてしてない。

翔太君、バレンタインにあなたに私の“好き”を伝えるね。その時まで待っててね。

ダンスの出番まで、あと十五分。体育館で衣装に着替えて、出番まで待機する。

「今までの練習した成果を見せなきゃね。みんな、頑張つてよ！」

ダンスを教えてくれた他の地域の人が、私達に頑張れコールを送る。

「みんななら大丈夫だからね」

「ハイッ！」

みんな気合いを入れて返事をする。

急に緊張してきたよ。大丈夫かな。間違えたらどうしよう…。きつと大丈夫だよ。

いよいよ本番がやってきました。

♪♪♪

一曲目の曲が始まって、全員が一斉に踊り出す。

一曲目の終わりのほうになると、また私のお腹がなったの。一つ一つの動きがよいしょって感じになってる。

下を向くと、地面がクルクルと回る。

あれ、あれっ…。な、何…？

クルクル…クルクル…。

全部がクルクル…。目の前の物が回ってる…。私、地面に落ちていくの…。

一体、何が起こったの？　もしかして、ダイエットのせい？　昨日の晩ご飯と朝ご飯抜いちゃったせい？　バレンタインで翔太君の事で悩んでて食べなくて、ダイエットしたからこんなことになったんだ。

誰にも翔太君を取られたくない。絶対に誰にも渡したくない。ずっと翔太君の側にいたい。気持ちを伝えるまでは気が張ってるけど、私は勇気を出して気持ちを伝えたいの。

ぼや～ん…。

目の前のものがだんだんとはつきりしてくる。
がばっ！

私は勢いよく飛び起きたの。

「大丈夫か？」

翔太君が心配して声をかけてくれる。

「…翔太…君…？」

「いきなり倒れたからビックリしたよ。瑠璃花ちゃんの家族がさっきまで見てたんけど、交代で見ることになったんだ」

翔太君は安心しきったように言った。

時計を見ると、二時前を指してる。

翔太君は午前中だけ参加するって聞いてたから、今いるって事は仕事休んだって事だよな。

「仕事は…？」

「休みにしたんだ。ホントは出なければいけないんだけど、無理に休んだよ」

笑って答えてくれ翔太君。

そんな翔太君を見てると、自分が情けなくなってくる。こうやってみんなに迷惑かけてるよ。ホント情けないよ…。

そう思うと、涙が出てきた。

「瑠璃花ちゃん？ どうしたんだよ？」

「翔太君に仕事休ませて、みんなに迷惑かけてるって…」

「仕事はオレが勝手に休んだだけだし、瑠璃花ちゃんが倒れたのは瑠璃花ちゃんのせいじゃない。みんなに迷惑かけてないし、誰だって協力していくもんだよ。わかった？」

翔太君、キツパリ言い切ってくれる。

「…そう…かな…？」

「そうだよ」

翔太君、笑顔になる。

「そういえば、瑠璃花は貧血だって。もう少し寝てたらいいよ」
翔太君がそう言った後に、私ベッドから降りたの。

「オ、オイ？ 大丈夫かよ？」

「もう大丈夫だよ」

「でも、もう少し寝てた方がいいって…」

「大丈夫だから…」

そう言っ出て行っった。

「瑠璃花、もう大丈夫？」

グラウンドに戻ると、真理が近付いてきて心配してくれる。

「うん。もう大丈夫よ」

無理に笑顔を作ってみせる。

大丈夫だけど私の心は大丈夫じゃない。また不安が広がっていく。

胸がズキンズキンと痛くなる。翔太君が優しくしてくれたのに逃げ
てきちゃった。なんてことしちゃったんだろ。後悔だよ。私ってば

ヒドイよね。好きな人から逃げるなんて最低だよね。

見たくない光景

倒れてから一時間、元気になった私。キャッキャッ騒いでるよ。

「翔太君！ 頑張つてー！！」

もうこのとおり元気だよ。

真理と翔太君も仲良くなって、真理は完全私の地域の人間になる。真理ちゃんと翔太君って呼ぶ仲になってる。二人が喋ってる時、私一人だけが取り残されてる。

「翔太君つてすごいよ。足早いし…」

「全然そんなことないって…。真理ちゃん、二人三脚やろうぜ！」

「オッケー！」

真理は親指と人差し指でOKのサインをすると立ち上がる。

その瞬間、ズキンと胸が痛くなつたんだ。

私、今にもため息つきそうな表情になってる…。？ 好きって気持ちが胸いっぱいになって、辛い気持ちをため息にして外に出すの。そうするとね、少しだけ楽になるんだ。

真理は私の気持ち知ってるくせに、わざと翔太君と仲良くしてる。さつき翔太君が私のこと優しくしてくれた時、嬉しかったのに…。私は逃げちゃったから、余計に後悔ばかりだよ。

—— ショウタクンノコト ダレニモトラレタクナイ！——

そんな思いが体に駆け巡った。ここにいても辛いだけ。だけど、ここを離れたら翔太君を誰かに取られそうで怖い。

「二人三脚に出る前に翔太君、これ」

真理が翔太君にペットボトルのお茶を渡す。

ボタン。

私、動揺して持ってた財布を落としちゃった。

真理と翔太君がこっちを向く。私は財布を拾って、どこかに走ってしまった。

もうチヨコあげない。あげないもん。翔太君は活発でスポーツ好き

な女の子のほうがいいんだよね。私みたいな女の子はダメなのかな？ 私はこのな好きなものにな。やっぱり失恋しちゃうのかな？

三十分経った頃、学校の正門に一人で座っていた。

真理ってヒドイ。こんなことってない。心はもうズタズタだよ。今は誰にも会いたくない。真理にも翔太君にも……。当分、一人でいたいよ。

「瑠璃花！」

一人でいたって思ってたところに真理がやってきたんだ。

「ここにいたんだ」

真理はやつと見つけたっていう口調で、私の隣に座った。

「ゴメンね、瑠璃花」

「……」

「もー、そんな顔をしないでよ」

真理の口調からは焦りが感じられる。

「真理ってばヒドイよ。私の好きな人なのに……」

「ホント、ゴメンね。瑠璃花の好きな人を取ろうなんて思ってたで、仲良くなりたかったんだ。それはわかって欲しいんだ」

真理は素直に言ってくれる。

そうだよ。真理が好きな人を取ろうなんてしないよね。勘違いしてた。私ってば子供だよ。私のほうがヒドイよね。

改めて、自分が情けないか思い知らされる。

「さっ、戻ろうよ。翔太君、心配してたよ」

真理は私の腕を引っ張る。

なんか、疲れちゃったな。何にもやりたくない。私、チョコあげないなんて思ってたけど、どうしよう。真理にはあげるって言ったんだよ？ あげるって決めて、ダイエットもしたんじゃない。バレン

タインまでもうすぐ。目の前まできてるんだよ。今なら迷ってる場合じゃないんだよ。グチグチ悩んでる場合じゃないんだよ。あげないなんて思っくんじゃなくてあげるって思わなきゃ。

――！

あ、翔太君だ！

人混みの中、翔太君を見つけちゃった。いなくなったこと謝らなきゃ。

「翔…」

途中まで呼んだけど呼べなかった。

それは、翔太君とあの公園のお姉さんと小さい子供の三人で歩いているのを見ちゃったの。

何？ どういうこと…？ この光景って…。まさか…もしかして…

あの二人の間に子供がいたっていうの…？

信じたくない…

翌日の夕方、翔太君の家に行く事にした。

昨日の私が見た光景の真相を確かめるために…。

昨日、私は散々泣いて目が腫れちゃってる。真理には心配かけたくないから、目にゴミが入って取れなくて腫れたっていかにもバレバレの言い訳を言ったんだ。

まだわからないよね。もしかしたら、親戚の人かもしれないし、なんとも言えないよね。自分で確かめなきゃわからないよね。

翔太君の家の前で深呼吸をすると、インターホンをゆっくりと押す。すぐにドアは開き、翔太君のママが出てきたの。

「あら、瑠璃花ちゃんじゃない。昨日の運動会お疲れ様。どうしたの？」

四十半ばで優しそうな笑顔の翔太君のママに泣きそうになってしまいうけど、きちんと確かめなきゃ。

「あ、あの…っ、昨日の運動会で翔太君が女の人と子供と一緒に歩いているの見ちゃったんですけど…」

声を振るわせながら、恐る恐る聞いてみる。

私達の間に流れる短い沈黙。私にとっては、長すぎる沈黙。何もないうって言うてくれたらいいのに…。

「実は、翔太は結婚してるの」

翔太君のママは嬉しそうに答えてくれた。

「一緒に歩いてた人は、奥さんと子供なの。子供は一歳半よ。二人が高校三年の時に出来た子よ」

翔太君のママがそう付け加えて言った。

その言葉に、私の顔が冷たくなっていくのがよくわかる。

「聞いているかもしれないけど、二十日に引っ越しするのよ」

「え…？ 引っ越し…？」

「そうよ。ここから車で一時間の場所よ」

私は何かで胸をつつかれたような感覚に襲われていた。

どうしよう…。失恋…。これって失恋だね…。どう考えたって失恋…だよ…。

翔太君には奥さんと子供がいて、奥さんからチョコをもらいたいつて思ってるんだよね。私がチョコをあげても答えは出てる。気持ちを伝えても答えは出てる。

もし、翔太君が私の気持ちを知ったらどうなるだろ？　きっとビックリすると思う。ううん、ビックリどころじゃない。私と翔太君の間が、ギクシャクしちゃうと思う。そんなの嫌だよ。

それに、二十日には翔太君家族が引っ越ししちゃう。もう会えなくなるんだ…。どんなに足掻いても無理なんだ。私、こんなに近くに住んでるのに、翔太君の事何も知らなかったよ。

「瑠璃花ちゃんどうしたの？　ボーッとしてるけど…」

翔太君のママがのぞきこむ。

「なんでもないんです」

慌てて、首を振る。

「…ならいいんだけど。あとは何か聞きたい事はない？」

「はい。ありがとうございます」

ペコリと頭を下げると、翔太君の家を後にした。

そして、私は公園に向かった。すると、翔太君一家がいたんだ。

「絵里、行くぞ」

翔太君が子供の名前を呼ぶの。

絵里と呼ばれた翔太君の子供は、ヨチヨチ歩きで翔太君の足元まできた。

そっか…。絵里ちゃんていうんだ…。

現実を見せられたようで、胸が傷んだ。

「瑠璃花ちゃん？！」

私を見つけると、翔太君はビックリした表情をする。

そして、この前会った公園のお姉さんもビックリしてる。

「翔太、知り合い？」

「うん。近所の子だよ」

「へえー。この前会ったよね」

「は、はい」

「どこだよ？」

「この公園だよ。ねっ？」

「はい」

顔は笑ってるけど心はズタズタ。

「それじゃあ、またな」

「またね」

「彼によろしくね」

お姉さん、翔太君の奥さんが私の耳元で一言言った。

「あ、はい…」

ぎこちない返事をした私。

「朝奈！ 何してるんだ？」

「今行く！ バイバイ」

私に手を振ると、翔太君のどこまで小走りで行った。

二月、寒い中、涙がこぼれる。

翔太君の奥さん、朝奈さんというんだね。二人の間に子供がいるんだ。昨日までは嘘だと思ってた。でも、今ので嘘じゃないってばかりわかった。

三人の後ろ姿。幸せそうな家族に写る。

私にもいつかこんな幸せな日がある？ 私が早くここに引越してれば、早く翔太君を好きになつてれば、何か変わってた？ 私、ホントに失恋しちゃったんだ…。

「ええ~~~~っ?! 失恋した?!」

「真理っ！ 声大きすぎる！」

バンッ！

机を叩いて真理に怒っちゃう。

昨日の事、真理に話したんだけど大きな声出すからついついイライラしちゃう。

「ゴメンって…。バレンタイン、どうするの？ 明後日だよ？」

「どうしよう。あげないほうがいいよね。あげる前に答え出ちゃってるし…」

頬杖について遠くのほうを見ながら言う。

失恋したばかりなのにあげるの？ あげても何も変わらないんだよ

？ チョコあげても、翔太君は朝奈さんと別れてくれない。瑠璃花、一体どうするの？

「奥さんと子供がいるってわかっててもあげるか、後悔しないって思うならあげなくてもいいし…瑠璃花次第だよ」

「そうだよね…」

そう、私次第だよ。私が決めなくちゃいけない。これは私の気持ちなんだから…。あげないって決めたら後悔するのは確かだよ。だって、二十日には翔太君は引越してしまうもん。あげなくて後悔はしたくない。

「真理、私、チョコあげるよ。自分の気持ちに嘘はつけないし、後悔したくないもん」

「そっか…」

真理は微笑んでうなづく。

ここまできたんだからあげたい。今でも結婚してること信じたくない。だけど、これが現実だもん。受け止めなきゃいけないよね。

朝奈さん、きつとビックリするだろうな。彼女は何も知らないもん。朝奈さん、あなたがいるのに翔太君の事好きになってゴメンね。朝奈さんがいるってわかってても、どうしても止められないの。この気持ち…。だから、もう少しでいいから、翔太君の事を好きでいさせてね。

この想いにサヨナラ…

二月十四日、聖バレンタインデー。

ついにその日がやってきたの。前の日、全然寝れなくて少し眠たい家を出る前にチヨコの入った袋を見つめる。

昨日、トリュフを作ったんだ。失恋だつて気付いてるけど頑張らなくちゃ。私の想いをチヨコに乗せて、翔太君に気持ちを伝えたい――。

翔太君の家の前をウロウロする私。

早くインターホン押して、翔太君に渡さなきゃいけないのに、人の家の前でウロウロしてたら完全に怪しい人だね。

「瑠璃花ちゃん…？」

出掛け先から帰ってきた翔太君が目丸くする。

緊張だよ。ううん、そんな事言ってる場合じゃない。グチグチ考えてるとダメになる。

「…これ…受け取ってもらえますか…？」

そう言つてチヨコの入った袋を差し出す。

翔太君、ビックリした表情をする。

「瑠璃花ちゃん、好きな人いるんじゃないかった？」

「え…？」

「朝奈から聞いたよ。公園でバレンタインの話をして、好きな人のためにダイエツトしてるって…」

「それが…翔太君なの…」

私の答えに、さっきよりビックリ表情の翔太君。

「ずっと…ずっと…好きだったの…」

緊張しながらもゆっくりとした口調で、自分の気持ちを伝える。

「ゴメン…オレ…」

翔太君、返事にくそうに口を開いた。

私、うなずくことしか出来なかった。

「オレ、妻と子供がいるし…さ」

「いいの。翔太君の答えはわかってた…」

泣きたいのをこらえる。

もういいの。答えは最初からわかってた。だけど、自分の気持ちを伝えたかった。このまま終わりにはしたくなかった。後悔はしかなかった。

「ゴメン…」

謝る翔太君に、首を振る。

十四歳の二月十四日、聖バレンタインデー。長い片想いは失恋で終わった。

長い片想いの相手は、年上の近所の人で、もう結婚してて子供もいたんだ。これは仕方ないよね。二人を引き裂くことなんて出来ないもん。

翔太君を想ってドキドキしてた毎日。あの時が一番輝いていたんじゃないかなって思う。私の恋は終わった。はやくこの想いにサヨナラしなくちゃ。

翔太君、色んな想いを私に勉強させてくれてありがとう。きっと翔太君を好きだったことを忘れないよ。

Forever Dream

二月二十日、翔太君家族は引越し。

なんか、これから会えなくて寂しいけど翔太君家族が決めたことだから、私がどうこう出来るわけじゃないもんね。

「瑠璃花ちゃん、色々ありがとうね」

朝奈さんが笑顔で言うの。

「いえいえ…私だって翔太君に迷惑かけてたから…」
泣きたいのを我慢して言う。

「瑠璃花ちゃん！」

家の中から翔太君が何かを持っていそいそと出てくるの。

「はい、これ」

高級そうな袋を私に渡す。

「開けていいかな？」

「うん、いいよ」

中を開けてみると、ハート型の指輪が入ってたの。

「うわぁ…綺麗…」

思わず声をあげてしまう。

目映いハートの指輪は、私の手の中でキラキラ光ってる。

「だろ？ 朝奈が選んだんだ。なっ？」

「そうよ。瑠璃花ちゃんに喜んでもらえて、選んだ甲斐があったわ」

朝奈さん、嬉しそうに微笑み。

「どこに引越すんですか？」

「埼玉なんだ」

「すごく遠い…ですね…」

引越し先にチクンと胸が痛んだ。

埼玉か…。すぐに会える距離ではないよね…。

「私、荷物運んでくるね」

朝奈さんが私に気を利かせて、翔太君と二人きりにさせてくれる。

「また遊びに来いよ」

「うん…」

「バレンタインの時はゴメンな」

「ううん。翔太君に気持ちを伝えたかったから…。翔太君の事わかってたけど、気持ちが止められなくて…。私こそごめんなさい」

「なんで謝るんだよ？ 瑠璃花ちゃんは謝らなくていいんだって…」
翔太君は笑顔で言ってくれる。

最後まで翔太君は優しいよね。そんなところ好きだった。だけど、もう戻れないよね。先に翔太君は結婚してただけ。私に魅力がなかったんじゃないくて、縁がなかっただけなんだよね。

「翔太、行くよ！」

荷物を運び終えた朝奈さんが呼ぶ。

翔太君家族は先に車に乗っている。

「今行く！ じゃあな！」

翔太君が行きかけようとした時、

「翔太君、待って！」

呼び止めたの。

「なんだよ？」

「手紙送っていい…？」

「いいよ。オレも送るな」

「それと、写真も…」

「わかった。じゃあな！」

そう言つて、車に入つて行く。

ブロロロー。

車は走り出した。

「バイバイ…翔太君…」

じわっ。

小さくそう言つたら、ためてた涙が出てきた。そして、しゃがみこんで声をあげて泣いたの。

翔太君家族が引っ越して、三ヶ月が経った。学年が上がって、中三になった。もうすぐで修学旅行が始まる。

私の中に翔太君はいない。翔太君が引っ越したから、気持ちが消えたんだと思う。引っ越して一度手紙が来たよ。近況報告してくれたんだ。新しい家での生活は楽しいって書いてあった。

「瑠璃花、西村君かつこいい！」

真理がキャピキャピ騒いでる。

西村君っていうのは、中三になって同じクラスの男子。

勿論、私と真理も同じクラスになったんだ。

真理ってば西村君にお熱なの。西村君は真理にとって仲の良い男子だから、気軽に話せる友達なんだ。

「私ね、西村君に告白しようと思うんだ」

真理は顔を赤らめて言う。

そんな真理が可愛いなんて密かに思っちゃった。こんなこと言ったら真理に怒られるかな？

「大丈夫だよ。真理ならきつと上手くいくよ！」

「ありがとう。じゃっ、行ってくるね！」

「え？ 今から行くの？」

「そうよ。善は急げって言うじゃない？」

真理は当たり前のように答える。

「そうだけと…何も休み時間に行かなくても放課後にでも…」
思わず止めに入っちゃう。

「今行かなきゃ、だよ。行ってくる」

真理は西村君の元に行ってしまう。

真理は迷いのない女なの。思ったら行動しちゃう。だから、ダダダッて行っちゃうんだ。ほら、もう西村君の前で告白しちゃってる。あーっ、私もその性格欲しいよー！

「真理どうだった？」

告白を終えて戻ってきた真理に早速聞く私。

「OKでした！」

真理はブイサインをしながら答えてくれる。

「おめでとう！ 真理！」

私は手を叩いて自分の事のように喜ぶ。

「ありがとう。話変わるけど、瑠璃花の夢って何？」

真理つてば突然話が飛ぶからビックリしちゃう。

「夢はね…女優か歌手になりたいなって思ってるよ」

「すごい夢だね」

「真理は？」

「私は体育の先生」

「真理だつてすごい夢持ってるんじゃない」

「お互い夢叶えようね！」

「そうだね！」

私達はクスクスを笑いあつた。

そして、五年後の十九歳、高野瑠璃花は無事に女優デビューしました。

初のドラマは、主人公の友達役の大学生。それに、CMまで出ちゃつて忙しい毎日を送ってる。

真理とは高校まで一緒に、真理は体育大学に進学した。たまに真理と連絡取ってるよ。それぞれ別々の道に進んだけど、お互い選んだ

道で活躍していきたい。

「はい、瑠璃花ちゃんこっち向いて―」

カシャツ。

カメラのシャッター音が撮影室に響く。

今は雑誌の撮影中。カメラマンさんが要求した表情をカメラの前で見せる。

芸能界に飛び込んで、楽しい事ばかりじゃないし辛いことも嫌な事もある。忙しくて睡眠時間が取れなくても、テレビの前では笑顔でいなくちゃいけない。だけど、ファンのみんなのために頑張りたいって今は思ってるよ。

「お疲れ様！」

スタッフの声が飛び交う。

私はスタッフのみんなにお疲れって声をかけると、楽屋に戻る。

「瑠璃花、ファンレターだよ」

マネジャーさんが段ボールに入ったファンレターを私に渡す。

「うわぁ…ファンレターなんて夢みたい」

あまりに嬉しくてファンレターの山の中に手を入れる。

そしたらね、見覚えのある名前を見つけたの。そう、あの翔太君からの手紙があつたんだ。

翔太君が引越してして半年ぐらいしか手紙のやりとりしてなかったから、なんか嬉しいな。感激してしまうよ…。

早速、手紙を読み始めたの。

高野瑠璃花さんへ。

女優デビューおめでとう。久しぶりの手紙ですね。毎週、ドラマ見えています。昔、近所に住んでた中学生のあの瑠璃花ちゃんが、テレビに出てるなんて今でも信じられません。朝奈と絵里も元気になります。また埼玉に遊びに来て下さいね。そして、絵里の後に二人子供が生まれました。二人共、男の子です。家族写真入れておきますので見て下さい。それでは、大変な事もあるかと思いますが、体に気を付けて頑張ってください。

青山翔太

そっかぁ…翔太君、今では三児のパパなんだ。元気そうで良かったよ。

そう思ったら涙が出てきちゃった。

五年前、長い片想いの相手は翔太君だったね。初恋だったの。翔太君には朝奈さんという奥さんがいて、絵里ちゃんという子供がいたんだ。バレンタインデーに失恋して、朝奈さんを恨んだりもした。でも、私にはいい経験だったよ。

翔太君、手紙と写真ありがとう。この手紙と写真を励みにして、芸能界頑張るよ。

「瑠璃花、ドラマの収録始まるよ」

マネジャーさんが私に声をかける。

本当にいい経験させてくれてありがとう。もし、芸能界で好きな人が出来て、噂になっても翔太君の恋を思い出すね。

私は涙をぬぐって、

「ハイッ！」

元気よく返事して走り出す。

今から大きく羽ばたいていく。誰からにも愛される芸能人のために、大きく大きく羽ばたいていくの。永遠の大きな夢に走り出すの——。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0193g/>

ずっと好きでいたかった

2010年10月9日00時49分発行